序

ひそかに愚案を回らして、ほぼ古今を勘ふるに、先師（親鸞）の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思ふに、幸ひに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。まつたく自見の覚語をもつて、他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて、故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところ、

いささかこれを注す。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々。

わたしなりにつたない思いをめぐらして、※親鸞聖人がおいでになったころと今とをくらべてみますと、このごろは、聖人から直接お聞きした真実の信心とは異なることが説かれていて、歎かわしいことです。これでは、※後のものが教えを受け継いでいくにあたり、さまざまな疑いや迷いがおきるのではないかと思われます。幸いにも縁あって、まことの教えを示してくださる方に出会うことがなかったなら、どうしてこの易行の

易行の道　阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生してさとりを開く他力の道。易行は難行に対する語。

道に入ることができるでしょうか。決して、※自分勝手な考えにとらわれて、本願他力の教えのかなめを思い誤ることがあってはなりません。

そこで、今は亡き親鸞聖人がお聞かせくださったお言葉のうち、耳の底に残って忘れられないものを、少しばかり書き記すことにします。これはただ、同じ念仏の道を歩まれる人々の疑問を取り除きたいからです。

本願　仏が菩薩の時におこした誓願をいう。また衆生救済のためのまさしく根本となる願をいう。ここでは阿弥陀仏の四十八願中とくに第十八願を指す。

他力　阿弥陀仏の本願力。阿弥陀仏が衆生を救済するはたらき。